

アジアと日本と領域間移動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024969

アジアと日本と領域間移動¹

大村光弘

1 日本はアジア？

最近、言語文化学科のスタッフ会議で改組について議論することが多くなった。人件費削減の課題が学科の現行体制維持に重く影を落としているのである。このような出だしで始めたが、人文社会科学部（おそらく静岡大学全体、ひいては地方国立大学法人全体）を取り巻く財政難を話題にしたいわけではない。学科のスタッフ会議の中で、地域を基準とした専攻として〈日本言語文化〉と〈アジア言語文化〉を併設したいという提案があがると、ある外国籍の教員が「日本もアジアでしょう!？」と呟いた。どうやら日本人は無意識的に、日本をアジアから切り離して位置づける傾向があるようだ。

静岡大学では、2013年に「全学的な教育改革・組織改革によるグローバル人材育成機能の強化—ターゲット・アジア人材育成拠点の構築—」案が採択されて以来、ABP (Asia Bridge Program) というものを運営している。ABPとは、アジア4か国（インド、インドネシア、タイ、ベトナム）の外国人留学生を対象として、対象国の現地および日本国内における入試選抜に合格した留学生に提供される教育プログラムのことをいう（『静岡大学広報誌SUCCESS』2016春号参照）。このプログラムが意図しているのは、上記アジア地区の優秀な学生に対して静岡県の企業と連携した専門教育を提供することによって、静岡県の企業のアジア展開を担うグローバル人材として育て上げることである。言い換えれば、ABPというのは、静岡の人・企業と上記アジア地区の人・企業を静岡大学主導の産学協同プログラムによって有機的に結びつける試みである。ここで

¹ 本研究ノートで用いているドイツ語の例文に関して、大藪正彦先生から貴重な助言をいただいた。また、韓国語の文法、文体、文化に関して、南富嶺先生から非常に貴重な助言をいただいた。両先生には記してお礼を述べたい。最後に、私の調査に快く協力してくれたアジア諸国からの留学生の皆さんにも、この場を借りて感謝の言葉を述べたい。

もアジアという語が指し示しているのは、日本を切り離れた特定のアジア地域であるようだ。

静岡大学では、超領域研究推進という試みも行われている。この一環として「アジア研究」というものがある。超領域研究推進のwebページには、「変貌を続けるアジア、そして日本」というタイトルのもと、「変貌を続けるアジアにおいて伝統と近代化の間で何が起きているかを見届けながら、日本がたどってきた歴史過程を振り返る必要があるろうし、日本がこれからアジアとどのような結びつきを作るべきかを考える必要があります。」と紹介されている。ここでも、日本はアジアから切り離され、別格の位置づけを与えられているように見える。

本多(2013)は、日本人が日本をアジアの一部として捉えない現象を、人が(鏡を使うなど、特別な手段を用いることなく)自分で自分の姿を見ることができないことに見立てている。日本人はアジアの一部である日本(すなわち、自分自身)が見えていない一方、視界に入っている他のアジア諸国は知覚できるので、アジアというカテゴリーから日本を除外して捉えるというのである。さらに、本多は池上(2006)に言及しながら、このような日本人の認識の仕方は、英語やドイツ語を母語とする人々の認識の仕方とは対照的であり、この認識の違いが言語の表現方法に反映していると述べている。たとえば、日本語では、他に誰もいない部屋の中の様子を誰かに伝える言い方として、(1)のように表現する。

(1) (ここには) 誰もいません。

一方、英語やドイツ語では(2)に示したように、概念化者(=発話者)を示す代名詞(me, mich)を伴って表現するのが一般的である。

- (2) a. Nobody is here except me.
b. Niemand ist hier ausser mich.

(1)のように表現した場合、誰もいないという状況を知覚している概念化者が言語化されていないので、アジアから日本を除外した上述の場合と並行しているように見える。一方、(2)のように表現した場合、誰もいないという状況を知覚している概念化者が言語化されており、概念化者は自分自身も含めた事態

の有り様を、第三者的立ち位置から客観的に観察しているようにみえる。

確かに、日本在住のアメリカ人やドイツ人が旅行先の中国から帰国したとき、(3)のように表現することはあっても(4)のように表現することはない事実を踏まえると、(1)と(2)の表現方法の違いが、アジアの中の日本の捉え方の違いにそのまま反映されているようにみえる。実際、本多(2013)はそのように考えている²。

- (3) a. I came back from China yesterday.
b. Ich bin gestern aus China zurückgekommen.
I am yesterday from China back-come
- (4) a. I came back from Asia yesterday.
b. Ich bin gestern aus Asien zurückgekommen.
I am yesterday from Asia back-come

念のため補足しておくとして、同じ文脈で日本人が(5)のように言ったとしても、この日本語はいたって自然な日本語である。

(5) わたしは昨日アジアから帰ってきた。

以下の議論では、一見して妥当と思われる本多(2013)の不備を指摘するとともに、代案として、少なくとも日本固有の思考・行動基準である「ウチとソト」を考慮に入れる必要があると主張する。さらに、本多(2013)が説明できない事例として放棄した(6 a)と(6 b)の対比も扱う。(6)において、(a)は自然な日本語であるのに対して、(b)は容認度がかなり落ちる。

(6) a. はやぶさが宇宙から帰ってきた。

² 本多(2013)は(3)と(4)の対比に言及してはいないが、アジアの中の日本の捉え方を扱った第6章の文脈上、日本語は概念化者を言語化しない言語であり、アジアから日本を除外する現象はこの特徴の反映であると主張していると考えられる。実際、6.4章において「アジアの女性」の「アジア」に日本人が含まれない解釈が普通であることを踏まえて、以下のように述べている。

日本人はアジアの人間ですが、姿の見えない自分自身および自分たちは言葉として明示しない傾向があるため、日本語では明示的な言葉である「アジアの女性」に日本人自身が含まれにくくなるのです。

b. ??はやぶさが太陽系から帰ってきた。

最小対立を成している宇宙と太陽系の違いが容認度の違いに影響を与えているであろうことは容易に推測できるが、本多（2013）も認めているように、自分（あるいは地球）を知覚しているか否かという着眼点からでは、この違いを説明することができない。ここでもまた、別の視点（「～に行く」「～から帰る」とはどういくことか）が必要となる。

2 アジアの中の日本をどう捉えるか

2.1 知覚されない自分自身

わたしは、2015年度に担当した大学院の授業の中で、留学生9人（中国籍4名、韓国籍1名、インドネシア籍2名、モンゴル籍2名）に（5）を自分の発話として仮定した場合どう感じるか尋ねたことがある。そのとき全員が、（5）は不適格だと判断した。彼らは皆、「日本はアジアの中にあるから、中国に行ったとしてもアジアを出たことにはならない。」と言った。明らかに彼らは、アジアという語に対して私たち日本人とは異なった認識をもっている。本多（2013）に則して日本人が（5）のように表現する理由を説明するならば、「日本語では、知覚されない自分自身が言語化されないのと同じように、知覚されない日本（＝自分自身）がアジアという語の指示対象から抜け落ちる」ということになる。

ここで、本多（2013）の主張の妥当性を検証するために、日本語と非常に類似した文法や表現方法を示す韓国語を取り上げてみたい。前節ですで見たとように、日本語という言語は概念化者を言語化しない傾向が強い。韓国語はというと、（7）-（9）に示したように、文法や表現方法の点で日本語と酷似していることがわかる。認知類型論的にみて、韓国語も日本語同様、概念化者が言語化されない傾向が強い言語ということになる。

(7) (여기에는) 아무도 없습니다 (cf. Nobody is here except me.)

ここには 誰も いません

(8) 머리가 아프다 (cf. I have a headache.)

頭が 痛い

(9) 여기는 어디입니까 (cf. Where am I?)

ここは どこですか

韓国語が概念化者を言語化しない言語であるならば、日本語同様、(5)のような表現が容認されてもいいと思われるが、わたしの授業を受講していた韓国留学生が答えていたように、事実はその逆である。「日本はアジアの中にあるから、中国に行ったとしてもアジアを出たことにはならない」からである。因みに、日本に旅行に出かけていた韓国人が帰国した時、(10)のように表現することもない。

(10) [日本に旅行に出かけていた韓国人が帰国したときの発話として]

나는 어제 아시아에서 돌아왔다

わたしは 昨日 アジアから 帰ってきた

どうやら、概念化者を言語化しないという認知類型論の特徴は、アジアから自国を除外することと直接的な因果関係にないようだ。

2.2 ウチとソト

わたしが代案として提案したいのは、ウチとソトの概念の導入である。ウチとソトは、たとえば、新社会学事典において次のように解説されている。

ウチとソト

各社会には、対人関係に関わる基本的な概念群と、その構成基準となる軸がある。日本について言えば、付き合い・仲間・身内・世間といった固有の概念があり、それらを構築する基準軸の一つとして「ウチとソト」を挙げることができる。それは、もう一つの軸「私と公」とからみ合って日本人の集団生活のあり方を規制している。「ウチとソト」は、自分たちとよそものという対人カテゴリーの二分法区分をさす。日本人は、相手が気の許せる「仲間」や「身内」であるか、それとも、相互に無関心でいられる「赤の他人」もしくは不信感を抱き排斥し合う「敵」であるか、この二つの範疇に分けてしまう傾向が強い。私事と公事とを分ける二分法とも関連して、内集団と外集団との区分意識を生み出すし、また対内道徳と対外道徳といった相対的な規範意識も生じやすい。ウチでの「和・なれなれしさ」、ソトでの「表向き・世間体・排他」は、対照的な属性を構成する。

(『新社会学事典』, p.87)

上記解説にあるように、ウチとソトとは単なる空間概念のことではなく、日本人の思考や行動の基準となる意識や規範を意味している。「ウチ」対「ソト」の区別は、自我の「内面」対「外面」の区別、ひいては家族や所属集団を基準とした「内集団」対「外集団」の区別を生み出すだけでなく、これらの対立カテゴリー（に属する対象）に対する態度の違いも生み出す。以下の例文は宮部みゆきの小説から引用したものだが、下線部の表現が「ウチ」対「ソト」の区別に基づいていることがよく分かる³。

- (11) うちへ帰るわ。（宮部みゆき、『クロスファイア』上）
（うち=わたしの家）
- (12) うちの人は配達に出てるから。（同上）
（うちの人=わたしの夫）
- (13) だけどうちは商売屋だから、簡単に引っ越すわけいかないしね。（同上）
（うち=わたしたち）
- (14) うちがホームページを開いてまもなくだから、二年くらい前だったかしら。（同上）
（うち=わたしたち）
- (15) 小暮たちを殺したグループのリーダーが、うちの学校にいるとかいないとか、そういう話でした。（同上）
（うちの学校=わたしたちが通っている学校）
- (16) 僕ら、仲間外れの感じですね。（同上）

³ 認知言語学の用語で言い換えると、「下線部の日本語は、「ウチ」対「ソト」のフレーム（Frame; Fillmore (1982)）に基づいて理解されている」と言うことができる。以下の本文で述べるように、日本語と同じように「知覚されない自分自身」を言語化しない韓国文化では、(11)–(22)の下線部に相当する表現が同様のフレームを背景に理解されていない。

「ウチ」対「ソト」のフレームを背景にした日本語の表現には、(ia)のようなウチ志向の複合語や、(ib)のようなソト志向の複合語がある（牧野誠一（1996: 56f））。

- (i) a. 内弁慶/*外弁慶、内祝い/*外祝い、内幕/*外幕、内輪/*外輪、内々/*外々
b. 外見/*内見、外目/*内目

ウチ志向の複合語は、内集団に重きを置く日本人の思考：行動パターンを反映しているし、ソト志向の複合語は、世間（即ち、外集団）から自分がどのように見えているのかを気にする日本人の気質を反映していると考えられる。そして、このような複合語の事例は、(ii)に示したような、空間概念のみを表す「内/外」を含む複合語が対義語をもつことと対照的である。

- (ii) 内側/外側、内枠/外枠、内のり/外のり、内がけ/外がけ、内股/外股

- (仲間外れ＝仲間ではない)
- (17) 新車の匂いのする濃いグレイの外車 (宮部みゆき、『クロスファイア』下)
(外車＝海外のメーカーが製造した車)
- (18) お嬢様を独り占めするためです。外の社会に出さないようにするためです。(同上)
(外の社会＝自分たちが属する社会とは別の社会)
- (19) 誰か通りかかれば、ちらっと見てもすぐに、淳子が外の町から紛れ込んできた人物と気づくことだろう。(同上)
(外の町＝自分たちが属する町とは別の町)
- (20) だって丸海は港町なんだから、外からいろいろ聞こえてくるものは、こりゃしょうがねえ。(同上)
(外＝丸海ではない別の地域)
- (21) だが坂木は、内心はともかく、外目には気にしている様子を見せなかった。(宮部みゆき、『模倣犯』上)
(外目には＝他人が見た時の印象としては)

ここで「ウチ」対「ソト」の概念に基づいて、アジアの中の日本を考察してみよう。日本が島国国家として他のアジア諸国と地理的に隔てられているということもあり、日本人は、自国を他のアジア地域から地理的にも心理的にも区別されるべき「ウチなる日本」として、他のアジア地域を「ソトなるアジア」として認識していると考えられる。日本人は「ウチ」対「ソト」というフレームを背景にして、アジアという語の指示対象を、日本を除いた他のアジア地域として限定しているのである。

日本語との比較のため、日本語と同じように「知覚されない自分自身」を言語化しない韓国語において、(11)－(21)の下線部がどのように表現されるのかを考察してみよう。(11)では、私の家という意味で「うち」が用いられているが、韓国語では내(内)ではなく집(家)を用いる。(12)の「うちのひと」のような表現に関しても同様に、내(内)ではなく집(家)が用いられる。(13)－(15)のような人称詞的用法においては、우리(我々)が用いられる。(16)の「仲間外れ」は따돌림であるが、外を意味する외は用いられない。(17)の外車に対する韓国語は외제차(外製車)であるが、この외は「自分たち」対「よその」という対人カテゴリーの二分法区分を基準にしたものではなく、単に「海外で」という意味である。韓国語には、「よその」を意味する「外」の用法

がないので、(18)–(20) の下線部は、다른사회 (他の社会)、다른마을 (他の町)、다른지역에서 (他の地域から) のように表現することになるだろう。最後に、(21) にあるような「外目」も、다른사람의눈 (他の人の目) となり、외 (外) の出番はない。

ココまでの議論を踏まえると、日本人が「アジア」から日本を除外するのは、日本固有の概念であるウチとソトを背景にした「ウチなる日本」対「ソトなるアジア」の区別に起因しているように思われる。しかし一方で、「知覚されない自分自身」という認知類型論的特徴がまったく関与しないとも言い切れない。と言うのも、「知覚されない自分自身」に訴える必要がないというだけで、それが間違っていることにはならないからである。そこで、採用はしないが、この可能性も残しておくことにする。

2.3 メトニミーの観点からみた「アジア」

アジアという語の指示対象が韓国や中国を指し示す現象は、上位概念を用いて下位概念を指し示していることから、メトニミーの一種だと考えられる。メトニミーは参照点能力に基づいて成立する心のはたらきである (Langacker (1993))。もう少し具体的に述べれば、認知的に際立った概念を参照点として言語化し、それと密接に関連する別の概念に注意の焦点を向ける心的作用を意味する。「ウチなる日本」対「ソトなるアジア」の図式では、前者に対する後者が十把一絡げに「アジア」として認識されるので、上位概念である「アジア」は、下位概念である「韓国」や「中国」と比べて認知的際立ちが高い。すなわち、参照点として機能するに十分な資格を備えているのである。

3 領域Aから領域Bへの移動をどう捉えるか

3.1 「宇宙」がよくて「太陽系」がだめ？

本多 (2013) は 6.6 章を「場合による違い」と銘打って、(22) と (23) の間に見られる容認度の違いを扱っている。はやぶさが行ってきたイトカワと帰ってきた地球は、どちらも太陽系にあり、そして宇宙にある。しかし「宇宙に行く／宇宙から帰ってくる」は自然な日本語の表現であるのに対して、「太陽系に行く／太陽系から帰ってくる」は、かなり容認度が下がる。

(22) a. はやぶさが宇宙に行った。

- b. はやぶさが宇宙から帰ってきた。(本多(2013: 44))
- (23) a. ??ははやぶさが太陽系に行ってきた。
b. ??ははやぶさが太陽系から帰ってきた。(本多(2013: 44))

本多(2013: 44f)は(22)と(23)の間の容認度の違いが「宇宙」と「太陽系」という語彙の違いに起因すると目算するものの、(22)や(24)が自然な日本語であるのに対して、(23)と(25)–(28)が不自然である事実の説明に窮している。

- (24) [韓国、台湾、ベトナムなどを旅して日本に戻ってきた人の言葉として]
a. わたしはアジアに行ってきた。
b. わたしはアジアから帰ってきた。
- (25) [韓国、台湾、ベトナムなどを旅して日本に戻ってきた人の言葉として]
a. #わたしは地球に行ってきた。
b. #わたしは地球から帰ってきた。
- (26) [神戸市外国語大学から市内の自宅に帰宅した人の言葉として]
a. #わたしはアジアに行ってきた。
b. #わたしはアジアから帰ってきた。
- (27) [神戸市外国語大学から市内の自宅に帰宅した人の言葉として]
a. #わたしは日本に行ってきた。
b. #わたしは日本から帰ってきた。
- (28) [神戸市外国語大学から市内の自宅に帰宅した人の言葉として]
a. #わたしは関西に行ってきた。
b. #わたしは関西から帰ってきた。

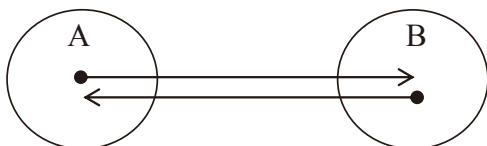
前節で言及したように、本多は「知覚されない自分自身」という観点から(24)のような日本語の用法を説明しようと試みたが、同じ観点から(23)と(25)–(28)の不適合性は説明できない。最終的に本多は、「言える場合と言えない場合でどのような性質の違いがあるのか、実は私自身にも今のところ分かりません(p.45)。」と結論づけている。

次節では、「～に行くこと」と「～から帰ること」を領域Aから領域Bへの移動という図式に基づいて規定し、これと「ソトなるアジア」を併用することで全ての事例が説明できることを証明する。

3.2 「～に行くこと」と「～から帰ること」

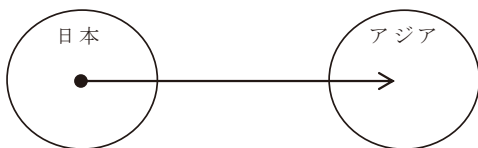
議論を始めるに当たって、わたしたちは「ある場所から別の場所に行く」ことや「ある場所から別の場所に来ること」を言い表すとき、(29) に示したように、問題としている移動を「固有境界をもつ2領域間の移動」として捉えていると想定してみよう。

(29) ～に行く／～から来る



この想定に従って、日本人にとっての「アジアに行く／アジアから帰る」ことを図式化してみよう。2節で主張したように、日本人は、日本を他のアジア地域から地理的にも心理的にも区別されるべき「ウチなる日本」として、他のアジア地域を「ソトなるアジア」として認識している。ここでは、それぞれが内集団と外集団として固有の境界線をもつ。したがって日本人にとって「アジアに行くこと」は、(30) に示したように、日本の境界を跨いでその外側に出るとともに、アジアとして括られる地域の境界を跨いでその中に入ることを意味する。

(30) [アジアに行く]



一方「アジアから帰ること」は、(31) に示したように、アジアの境界を跨いでその外側に出るとともに、日本の境界を跨いでその中に入ることを意味する。

(31) [アジアから帰る]



2節で言及した留学生たちにとっては、日本も中国も上位範疇であるアジアの一部であるので、(32) のように表現することはあっても (33) のように表現することはない。

(32) [わたしの授業を受講していた留学生たちにとって]

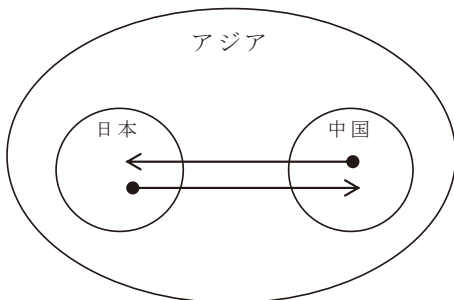
- a. わたしは先月中国に行った。
- b. わたしは昨日中国から帰った。

(33) [わたしの授業を受講していた留学生たちにとって]

- a. #わたしは先月アジアに行った。
- b. #わたしは昨日アジアから帰った。

これは、中国という語を用いた (32) が2領域間の移動（すなわち、日本の境界も中国の境界も跨いで移動している）を言い表しているのに対して、アジアという語を用いた (33) が単一領域内部の移動（=日本の境界は越えているもののアジアの境界は越えていない）として認識されるためである。この単一領域内の移動は、(34) のに示したような図式で表すことができる。

(34)



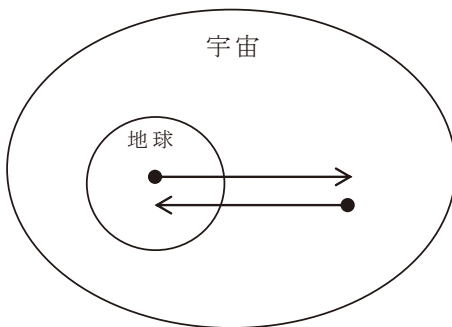
つぎに、本稿の想定を(25)–(28)の事例に当てはめて考察してみよう。これらの事例全てにおいて、そこで表現されている移動は(34)で表現されている移動と同じ種類のものである。すなわち、上位範疇に当たる領域の名称を用いた結果、下位領域間の移動が単一領域内の移動として表現されている。結果として、(25)–(28)では「～に行く」ことや「～から帰る」ことが適切に言語化されておらず、不自然な日本語となってしまったのである。

最後に、(35) (= (22)) について考察してみよう。(35) はなぜ容認されるのであろうか。とりわけ、(36) (= (23)) との違いはどこにあるのだろうか。

- (35) a. はやぶさが宇宙に行ってきた。
- b. はやぶさが宇宙から帰ってきた。
- (36) a. ??はやぶさが太陽系に行ってきた。
- b. ??はやぶさが太陽系から帰ってきた。

(35) のように表現した場合、そこには(37)に相当する図式が成立しているのではないかと疑いをもつ人がいるかもしれない。(37)では、下位領域の地球の境界線を跨いでその外側に移動したり、その内側に入ったりしているものの、上位領域である宇宙の内部を移動しているに過ぎない。結果として、「宇宙に行く」とも「宇宙から帰る」とも言い表せないことになってしまう。

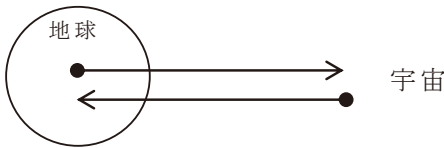
(37)



そこで、(35) についてもう少し深く考察してみよう。そもそもわたしたちは、宇宙を境界で囲まれた領域として知覚しているのだろうか。答えは否だ。

わたしたちは、地球が宇宙の中にあることは知っているものの、宇宙がどのような形をしているのか、終わりがあるのかなど、およそ宇宙が境界によって区切られた領域として存在するのかなど、まったくと言っていいほど知識がない。おそらく、わたしたちは(35)において言語化されている移動を、(38)のように認識していると思われる。

(38)



(38) では、「宇宙」が境界をもたない空間として捉えられていることによって、地球と宇宙間の移動は、(固有境界をもつ) 単一領域内の移動としてではなく、(一方のみが固有境界をもつような) 2 領域間の移動として認識されると提案したい。「宇宙に行くこと」は、地球という領域の境界を跨いで、地球を厳密な意味で含んでいるといえない領域に移動することであり、「宇宙から帰る」ことは、そのように認識される領域から地球の境界を跨いでその領域内に移動することを意味する。このことが(35)の表現を可能にしている所以である。3.2 節の冒頭で、「ある場所から別の場所に行く」ことや「ある場所から別の場所に来ること」を言い表すとき、(29)に示したように、固有境界をもつ2領域間の移動として捉えていると想定したが、(38)を認めることにより若干の修正が必要となった。そこで、「～に行く」と「～から帰る」とは、「少なくとも一方が固有境界をもつような2領域間の移動」であると再定義しておく。

では、(36)はなぜ容認度が落ちるのであろうか。わたしたちは、太陽系について何を知っているのか、考えてみよう。例えば、以下の記述は広辞苑から引用したものである。

太陽系

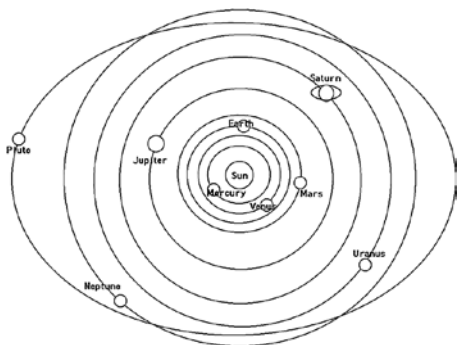
太陽を中心に運行している天体の集団とそれを包む空間。水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星の8惑星と、冥王星などの準惑星、これに属する合計100個余りの衛星、並びに7万個以上の小惑星および彗星などを含む。彗星の軌道面を除けば、これらの諸

惑星の軌道はほぼ同一平面内にある。

(広辞苑)

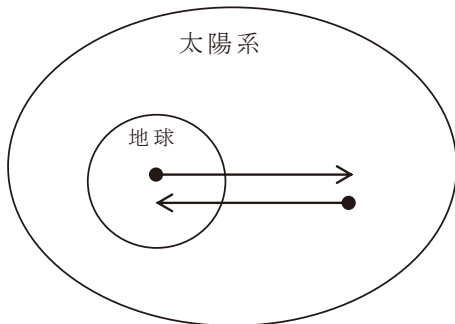
また、わたしたちはTV、百科事典、インターネットなどをおして (39) のような画像を目にすることがある⁴。

(39)



わたしたちは、「宇宙」という概念と比較すると、「太陽系」という概念についてははるかに具体的イメージを持っていることが分かる。とりわけ、(39) のようなイメージがあると、わたしたちは太陽系が有限の構成要素からなる集合体であると理解するだけでなく、そこに固有境界のイメージを加えることになる。わたしが提案したいのは、このような状況が (40) の図式を成立させ、(36) の容認度に影響を与えているということである。

(40)



⁴ https://www.wpclipart.com/space/solar_system/diagrams/solar_system_lineart_2.png.htmlより引用。

(40) では、「太陽系」が固有境界をもつ領域として捉えられている。ここで表されている移動は、「太陽系」の下位領域である「地球」の境界線を跨いでその外側に出たり、その内側に入ったりしているものの、いずれも上位領域である「太陽系」の内部移動のため、太陽系という語を用いて「太陽系に行く」とも「太陽系から帰る」とも言い表せないのである。

因みに、(35) と (36) の対比は日本語に限った現象ではない。実際、上記の留学生達にそれぞれの母語で (35) と (36) を表現した場合の容認度について尋ねてみると、日本語の対比と全く同じ文法判断を返した。当然の結果である。なぜなら、「宇宙」と「太陽系」に関してわたしたち日本人も留学生達も、同じイメージに基づいた指示決定をしているからである。

4 結語

本稿では、アジアの指示対象から日本を除外する用法を扱った。「知覚されない自分自身」に基づく本多 (2013) の分析に対する疑問点を指摘し、「ウチ」対「ソト」という日本文化に固有の思考・判断基準に基づいた代案を提示した。具体的には、日本人は、日本を他のアジア地域から地理的にも心理的にも区別されるべき「ウチなる日本」として、他のアジア地域を「ソトなるアジア」として捉えるため、アジアという語の指示対象が日本を除いた他のアジア地域に限定されるのである。

本稿ではさらに、本多 (2013) が説明できないとしている (22) と (23) の対比や、(22) - (28) に見られる語彙選択から生じる文の容認度の違いも扱った。語彙の選択に起因する容認度の変化を、「～に行く」と「～から帰る」として表現される移動を適切に図式化 (すなわち、概念化) することによって説明した。具体的には、当該移動概念を「少なくとも一方が固有境界をもつような 2 領域間の移動」と定義し、容認度が落ちる事例では、対象とする移動が単一領域内の移動として言語化されているために不適格となると分析した。

引用文献

Fillmore, Charles J. (1982) "Frame Semantics," in *The Linguistic Society of Korea* (ed.), *Linguistics in the Morning Calm: Selected Papers from SICOL-1981*, Hanshin Publishing Company, Seoul.

本多啓（2013）『知覚と行為の認知言語学』，開拓社，東京。

池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚：「ことばの意味」のしくみ』，日本放送出版協会，東京。

Langacker, Ronald W. (1993) “Reference-Point Constructions,” *Cognitive Linguistics* 4 (1), pp.1-38.

牧野誠一（1996）『ウチとソトの言語文化学』，アルク，東京。

辞典

森岡清美・塩原勉・本間康平他（編）（1993）『新社会学辞典』，有斐閣，東京。

新村出（編）（2008）『広辞苑』第6版，岩波書店，東京。